

町屋の暮らし再構築

ー 住民は歩み、助け合い、廻る ー

Keywords

町屋 コミュニティ 相互扶助
住環境 パブリック 街族的共同体



DZ22639 成田 晴彦

1. はじめに

現代の居住環境は、家族単位で住戸が構成され、住戸内（家族内）のプライバシー確保を重視した設計思想に基づいている。この構造的特性により、相互扶助的な関係性は、主として住戸内に閉鎖的に限定される傾向にある。しかしながら、この状況は単身者や高齢者といった世帯構成員にとって、深刻な課題をもたらす可能性がある。すなわち、生活維持に必要な共助機能が住戸内で完結することを前提とするならば、これらの人々は単独あるいは極めて少人数の構成員との共助の中で生活することを余儀なくされる。近年の住環境は、専ら生活機能に特化し、外部との関係性を遮断する閉鎖的な構造を呈している。その結果、特に単身者や高齢者は社会的な孤立に陥りやすく、生活を支える共助的なネットワークの構築が困難な状況にある。したがって、今後の住環境計画においては、生活の場とコミュニティの領域を拡張し、両者を有機的に重ね合わせることで、相互扶助的な関係性を住戸外にも広げることが求められる。

2. 敷地選定

2.1 敷地概要

対象敷地は横浜市南区とする。1859年の横浜開港以降、大正期の京浜工業地帯の形成に伴って労働者の居住地として住宅地が増加した。その後、戦後復興とともに人口が増加し、本格的な住宅地としての開発が進められた。現在では、歴史的な下町の雰囲気を残しつつ、再開発や高齢化への対応も進められている。弘明寺観音から続く弘明寺商店街や、南区全域を流れる大岡川沿いのプロムナードは、地域住民にとっての散歩道となっており、下町情緒と生態系に富んだ自然環境を兼ね備えている。また、対象敷地周辺には多くの学校施設が存在し、昼過ぎから夜間にかけて多くの学生の姿が見受けられる。

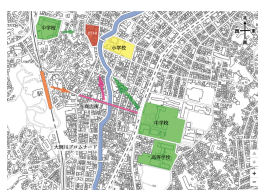


図1 敷地周辺概要



写真1 大岡川の風景

2.2 敷地分析

(1) 人口構成の分析

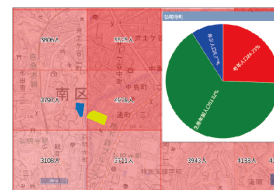


図2 敷地周辺

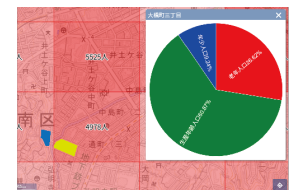


図3 小学校周辺

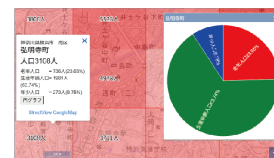


図4 駅周辺

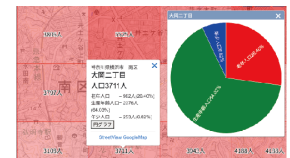


図5 大岡二丁目

対象敷地周辺地域の住民の年齢構成を分析した結果、老年人口（65歳以上）が総人口の25.55%、生産年齢人口（15歳以上65歳未満）が62.84%、年少人口（15歳未満）が8.46%を占めることが明らかになった。これらの比率は、図3から図6に示すそれぞれの年齢階層別人口を総人口で除して算出したものである。この結果、対象地域周辺では、高齢者が住民の4分の1以上を占めており、老年人口の割合が比較的高水準にある一方、年少人口の割合が低いという人口構成上の特徴が認められる。これは、当該地域が高齢化の傾向を有していることを示唆している。

(2) 1世帯あたりの人口および世帯構成の推定

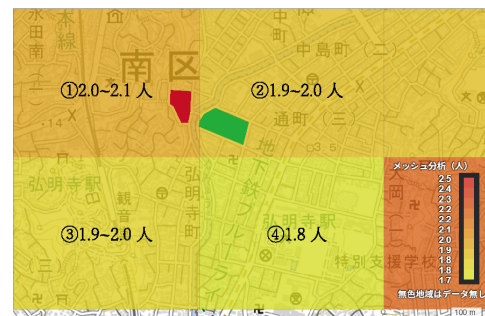


図6 1世帯あたりの人口分布

対象地域における世帯数は、図7に示す各エリアの総人口を当該地区の平均世帯人数で除すことにより推定した。具体的な算出結果は以下の通りである。

表1 推定世帯数の算出

エリア	総人口（人）	平均世帯人数（人／世帯）	推定世帯数（世帯）
①	3,797	2.05	約 1,852.2
②	4,978	1.95	約 2,552.8
③	3,108	1.95	約 1,593.8
④	3,711	1.80	約 2,061.7

これらの値に基づき、当該地域全体の1世帯あたりの平均人口を加重平均によって算出した結果、総人口15,594人に対し、推定総世帯数は8,060.5世帯となり、平均世帯人口は「約1.93人」とであると推定される。この推定値は、全国平均と比較して低位にあり、当該地域が少数世帯（特に単身世帯や二人世帯）によって多数を占められる傾向にあることを強く示唆している。

(3) 集合住宅における世帯構成の推定と考察

対象地域の人口構成（1）および世帯構成（2）の分析結果に基づき、約50世帯規模の集合住宅を想定した場合の世帯類型別の概算内訳を以下のように推定した。

表2 世帯類型別の概算内訳

世帯類型	推定世帯数（世帯）	推定割合
単身世帯（高齢者を除く）	19～21	約38%～42%
高齢者単身世帯	9～11	約18%～22%
高齢者世帯（2人以上）	5～6	約10%～12%
夫婦2人世帯（高齢者を除く）	8～9	約15%～18%
家族世帯（子を含む複数人世帯）	2～4	約5%～8%
合計	43～51	概ね90%～102%

この推定結果から、想定される集合住宅においては、単身世帯および高齢者世帯が相対的に高い割合を占め、少数世帯が中心となる住民構成が見込まれる。このような人口構成を有する住居地域において、果たして住戸内で生活が完結する従来型の住まい方が有効であると言えるだろうか。むしろ、こうした地域特性だからこそ、生活空間を共有・重層化しながら「集まって住まうこと」の意義を再考する必要があると考えられる。

3. 町屋フィールドワーク調査

職住一体型の住居である町屋およびその周辺に形成されてきた街並みの空間構成は、現代社会における共助的コミュニティの形成に資する可能性を有していると考えられる。町屋は、居住と生業が不可分に結びついた建築形式であり、建築単体のみならず、街路や近隣空間を含めた都市的環境との関係性の中で成立してきた。本研究では、こうした町屋建築およびその周辺の街の形態に着目し、日本各地に残る事例を対象として調査を行うことで、町屋における住まい方および内部空間の特性を把握する。

町屋の住環境においては、現代の住宅のように生活のすべてが個々の住戸内で完結することは少なく、住民は街全体を生活の場として利用していた。その結果、住民

同士が日常的に接触する機会が多く、相互扶助や共助が生じやすい環境が形成されていたと考えられる。また、街路に面して設けられた「見世」は、商いなどの仕事の場として機能し、住宅内部でありながらも街に開かれた空間であった。このような構成により、町屋には居住者以外の他者が日常的に出入りすることが常態化しており、住環境と街路が有するパブリックな性格との距離は極めて近いものであった。このように、町屋を中心とした当時の暮らしにおいては、街の中に生活が存在し、同時に住環境の内部にパブリックな性格が内包されていたといえる。こうした状況のもとで、街、生活、人、建築が相互に作用し合うことにより、家族という最小単位を超えた共同体、すなわち「街族」とも呼びうる関係性が形成されていた。この街族的共同体は、単なる地縁的つながりにとどまらず、日常生活の中で育まれる実践的な共助関係を基盤としていた点に特徴がある。本研究では、このような町屋に見られる空間構成および生活様式に内在する共同体形成のメカニズムを再評価し、それを現代社会に適応可能な形で再構築することを目指す。そのために、町屋の形態を現代的文脈において再解釈し、街、生活、人、建築が再び交互作用する環境をいかにして実現し得るかを検討することを、本研究の最重要課題として位置づける。

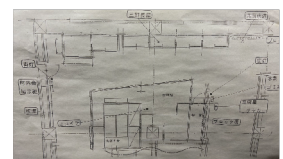


写真2 路地と共同水道（荒川区町屋）



写真3 蔵造り町屋（川越市）



写真4 街路と見世（京都・奈良）

参考文献

1) 京都文化博物館

<https://www.bunpaku.or.jp/>

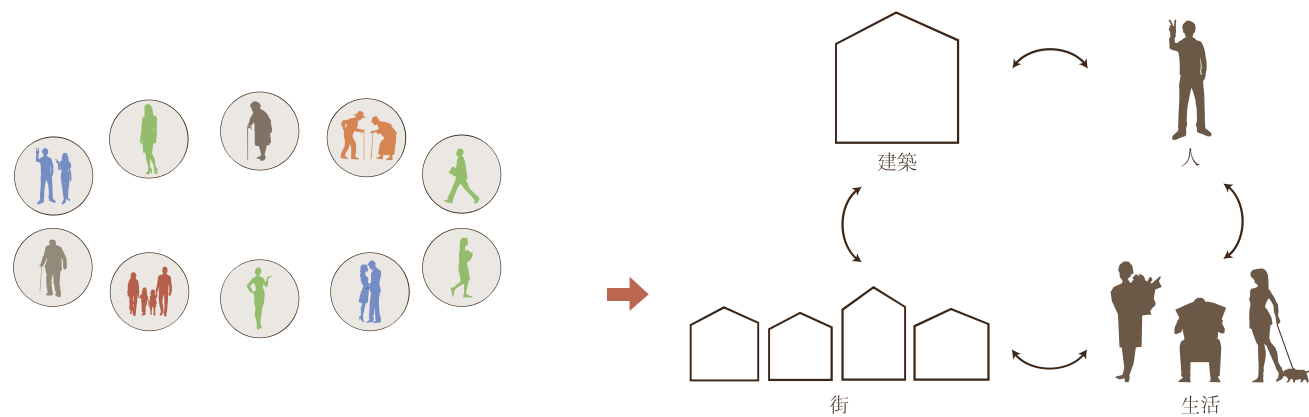
2) open-hinata

<https://kenzkenz.xsrv.jp/open-hinata/>

3) RESAS 地域経済分析システム

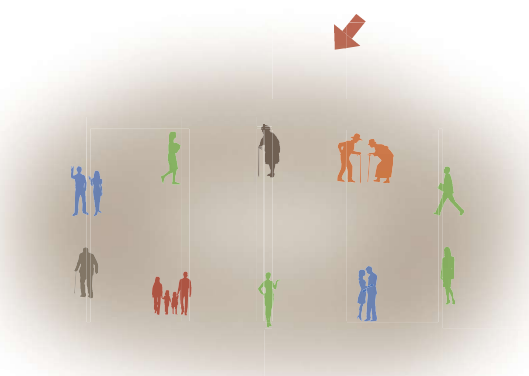
<https://resas.go.jp/>

コンセプト



現代の住環境の形態では、高齢者や単身者などが孤立しやすく、交流や助け合いの幅が狭い。

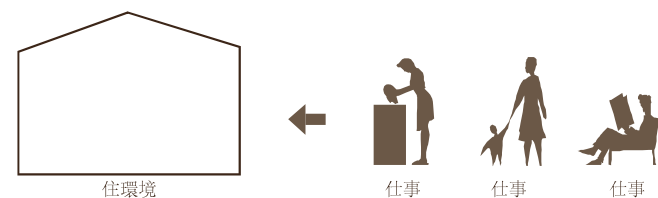
町屋の暮らしを現代版に再構築し、建築、街、人、生活を再び交互作用させることで...



暮らしと助け合いの幅を広げ、重ねる。

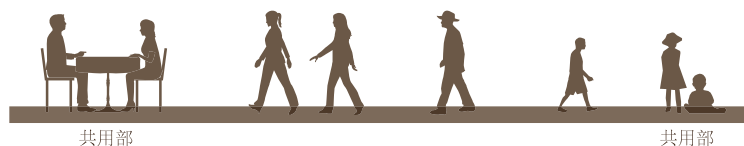
プログラム

05-1.住みながら働く（見世の場について）



職住一体である町屋の生活様式を現代に再構築し、
住環境の中で働くことのできるプログラムを採用。
見世で働く住民同士の共助のきっかけや、
敷地周辺の住民との
インフォーマルな関係性の構築の拠点となる。

05-2.歩み住まう



町屋の街路的形態を再構築し、
住民の生活要素を住戸の外に与える。
住民は住戸外の生活要素を求め、共用部や敷地全体を歩く。
暮らしのスケールの拡張が、
日常生活の中で育まれる実践的な共助関係を生み出す。

